

## 鹿児島県の転換畑における秋大豆のは種時期

東 孝行・江畑正之 (鹿児島県農業試験場)

HIGASHI, T. and M. EBATA : Effects of Sowing Time on the Growth of Autumn Soy beans (*Glycine max* Merr.) in the Rotational Paddy Field in Kagoshima Prefecture

鹿児島県の大豆は、従来夏大豆が主体であったが、面積の減少につれ秋大豆の割合が多くなった。近年ことに転換畑における大豆作のほとんどが秋大豆に変わってきた。本研究では、水田転換大豆の多収安定化をはかるため、秋大豆のは種時期について検討を行った。

第1表 収穫時の莖数 (本/m<sup>2</sup>)

は種月日 品種名	7月13日	7月16日	7月23日	7月30日	8月6日
アキセンゴク	11.4	17.7	18.3	18.8	23.8
フクユタカ	13.0	18.1	18.3	18.0	21.0

注) 1) 7月13日播は早害による発芽不良。  
2) 8月6日播は晩播のため間引きせず3本立。

### 1. 試験方法

1981年、転換3年目のは場において早生品種フクユタカ、晩生品種アキセンゴクを供試し、7月13日～8月6日までに5回は種して生育様相、収量などについて検討した。栽植様式は、畦巾140cmで畦立し、条播60cm、株間15cmの2条間で株当たり2本立 (m<sup>2</sup>当り19.0本) を原則としたが、収穫時の莖数は第1表のとおりであった。

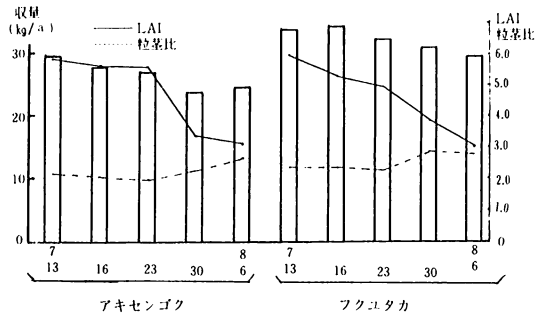
### 2. 試験結果及び考察

本試験を行った1981年は、7月13日播の両品種に早害がみられ、また8月6日播のアキセンゴクに降霜害がみられたほかは、倒状、病虫害などの大きな障害も少なく、比較的順調な生育状況であった。

各は種時期ごとの生育過程を比較すると、は種～開花期までの期間は晩播ほど短くなり、品種間では晩生のアキセンゴクの短縮程度が大きかった (第1図)。また開花～成熟期までの期間は、両品種ともは種期による変動は小さく、アキセンゴクが約78日 (8月6日播は霜害)、フクユタカ

が約69日であった。したがっては種時期別の全生育期間の差は、開花期までの期間の短縮に影響されるといえる。

収量は、7月13日播が干ばつによる発芽不良で、莖数が少なく、やや乱れたが、全体的には早播ほど多収を示し、倒状などの障害がない場合、早播の効果が認められた。また8月播でも密播することにより7月下旬播と同程度の収量が得られた。なお品種別では各は種期ともフクユタカがアキセンゴクに優れた (第2図)。

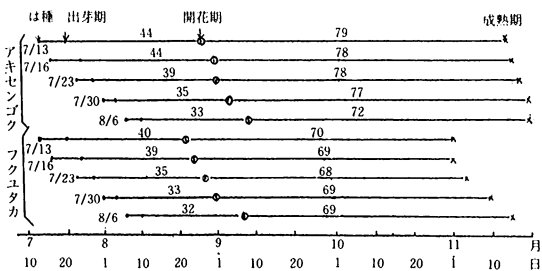


第2図 は種期別収量及びLAI・粒茎比の比較

各は種時期別の繁茂量を比較するため、開花期における葉面積指数を調査した結果、両品種とも7月23日播までは約5～6の範囲内で徐々に減少するが7月30日播以降になると急激に減少し、繁茂程度の低下が著しかった。これは主茎節数の減少、主茎長の伸長不足によるところが大きかったものと思われた。また粒茎比については、葉面積指数と逆で、7月23日播まではほぼ一定であったが7月30日播以降になると増大し、繁茂量の割に効率良い登熟がみられ、収量低下も比較的少なかった。

### 3. まとめ

以上の結果をまとめると、両品種ともは種時期により登熟期間は大きく変わらないが、は種～開花期までの期間が異なり、早播ほど栄養生長期間が長かった。このため密植条件で早播した場合、蔓化、倒状の危険性があり、特にアキセンゴクが著しいものと思われた。また両品種ともは種時期が早いほど繁茂量が大きく、多収をあげたが、7月23日～7月30日播の間で茎葉の繁茂量及び粒茎比などに時期的な差がみられた。したがっては種時期別の栽植密度を考える場合、7月25日頃までは種とそれ以降の種では最適栽植密度は異なるものと思われた。



第1図 は種期別生育ステージ模式図